

2018年6月11日

## COAR 総会 2018 参加報告

COAR 総会に参加し、オープンアクセスおよびオープンサイエンスに関する最新の国際動向について情報収集を行った。今回は30か国ほどから約100名の関係者が参加し、過去最大規模のものとなった。

期間：2018年5月14日（月）～17日（木）

場所：ZBW Leibniz information Centre for Economics（ドイツ ハンブルク）

参加者：山地 一禎（情報・システム研究機構 国立情報学研究所 オープンサイエンス基盤研究センター長／コンテンツ科学研究系 教授）

松村 友花（JPCOAR メタデータ普及タスクフォース 作業部会員／神戸大学附属図書館 情報管理課 情報システム係 係員）

日程：

2018年5月14日（月）

- ・ Repository Metrics Workshop

2018年5月15日（火）

- ・ Repository Metrics Workshop

2018年5月16日（水）

- ・ Pre-Conference Session: Metadata Elements and Controlled Vocabularies for Repositories
- ・ Plenary-Welcome Session
- ・ Open Science and the Role of Repositories
- ・ Report from Technical and Strategic Aligning Repository Networks Meetings
- ・ Next Generation Repositories: Vision, Implementation Status, and Pilot Projects

2018年5月17日（木）

- ・ COAR General Assembly
- ・ Plenary Meetings
- ・ Regional Updates-15 minute presentations of the repository landscape in countries and regions: Ethiopia, South Africa, China, Japan, Korea, Australia
- ・ Regional Updates-15 minute presentations of the repository landscape in countries and regions: European Union, Russia, Latin American, United States, Canada
- ・ Unleashing Science for Development: The Case for Public Infrastructure in Scholarly Communication

詳細：

<https://www.coar-repositories.org/news-media/coar-annual-meeting-and-new-executive-board/>

## 1. 第9回総会

### ◇ 新規参加機関

2015年4月時点では98だった参加機関が2018年5月には129機関となっており、この3年間で参加機関が著しく増加している。

改めてJPCOARと所属する11機関が参加したことに触れ、Kazu Yamaji氏の活動によってこの参加が可能になったことに感謝を述べられた。

それ以降にも1機関がspecial memberとして、また16機関が個別に新規参加となった。

### ◇ 2017/18年の活動報告

戦略的方向性に沿って活動報告がなされた。

#### I. 優れた学術研究や教育に対する支援を行うための国際的な研究基盤の重要な要素として、持続性のある国際的なオープンアクセスリポジトリのネットワーク構築を促進する

- 持続可能な国際研究基盤を構築するための5つの必須条件を示すインフォグラフィック "[Five Prerequisites to a Global Knowledge Commons](#)" を公開
- Elsevier が Bepress を買収したことに対して COAR と SPARC が共同で [反対声明](#) を公表
- リポジトリの役割や利益に関する意識啓発のためのフライヤー "[European Repositories Infographic](#)" を公開
- オープンサイエンスやオープンアクセス、リポジトリに関する様々な会議、イベント等への参加

#### II. リポジトリコミュニティを支援し、リポジトリやリポジトリネットワークの構築・運営に関する地域的な能力を向上させる

- ウェビナーや数か国のリポジトリ研修活動への助成を実施
- Asia OA Meeting を開催
- アジアにおけるオープンアクセスの動向を調査・報告書 "[Asia Open Access Regional Survey Results](#)" を公開

#### III. 相互運用性や標準およびベストプラクティスの定義や普及

- リポジトリネットワークの連携に関する [国際協定](#) を発表
- 次世代リポジトリの機能・技術指針に関する報告書 "[Behaviours and Technical Recommendations of the COAR Next Generation Repositories Working Group](#)" を公開
- COAR Controlled Vocabulary の策定および多言語化の実施と [インフォグ](#)

### ラフィックを公開

#### IV. リポジトリやリポジトリネットワークにおける付加価値のあるサービスの構築および実装の促進

- － オープンメトリクス Interest Group はイギリスとアメリカにおけるさまざまな利用統計に関する ウェビナー を開催
- － 研究データ管理 Interest Group は研究データ管理に関する活動や課題について、各機関の情報共有をサポート

#### ◇ 予算について

現在の COAR の活動資金は、参加費、OpenAIRE project の欧州委員会からの助成、総会参加費、その他補助金によって構成されている。

監査が行われた結果、COAR は引き続き 2020 年まで非営利であることが認められた。

また、前回の COAR 総会でも議論された参加費の値上げについて再び提案された。現在は予算のうちの半分しか参加費でカバーできておらず、またここ 3 年間で参加メンバーは 30%増加し、さらにこの増加が継続できたとしても予算が不足することが予想されている。

そのため、2019 年からは 750 ユーロへの値上げ、およびさらに 2,000 ユーロを追加支払いできる団体は総会へ無料で参加できるようにすることが提案された。

質疑応答ののち、61 機関のうち 47 機関の賛成により承認され 2019 年より適応されることとなった。

#### ◇ 2018/19 年の計画

2018 年の残りはリポジトリネットワークと次世代リポジトリのために注力し続けるとともに、続く 2019 年からの 3 年間における新しい戦略的方向性をたてる予定である。

また、COAR のウェブサイト・ソーシャルメディアの改善や、リポジトリで公にできないデータをどのように保護するかという重要な課題に関する手引きの提供を目指す。

#### ◇ 運営委員改選

COAR の運営委員会は 3 年を任期としており、現在の委員会は 2018 年 9 月までとなっている。

そのため、次期運営委員会（2018 年 10 月～2021 年 9 月）のメンバーを決めるための選挙が行われた。

運営委員会は議長や副議長、財務担当者を含む、最大で 8 人のメンバーで構成さ

れ、今回の選挙にあたっては9人の候補者があった。

各候補者から自己紹介があり、投票により以下の8人が新運営委員会メンバーとなった。

- Eloy Rodrigues (UMINHO@ポルトガル)：議長
- Kazu Yamaji (NII@日本)：副議長
- William Nixon (GLA@イギリス)：財務担当
- Bianca Amaro (IBICT@ブラジル)
- Wolfram Horstmann (UGOE@ドイツ)
- Oya Rieger (Cornell University@アメリカ)
- Selloane Daisy Selematsela (UNISA@南アフリカ)
- Martha Whitehead (QUL@カナダ)

#### ◇ 各国の事例報告

各国の最新の取り組みに関する事例報告が行われた。

- エチオピア：[National Academic Digital Repository of Ethiopia \(NADRE\)](#)
- スーダン：[Institutional Repositories in Sudan](#)
- 南アフリカ：[State of Repositories in South Africa: The African Open Science Platform](#)
- 中国：[From Open Repository to Open Scholarly Communication: Experiences Learned in China \(CAS\)](#)
- 日本：[Japan Update](#)
- 韓国：[OA Repositories and Research Data Hub in Korea](#)
- オーストラレーシア：[The Australasian repository scene](#)
- ロシア：[Russian Quest For Open Science National Aggregator of Open Repositories \(NORA\)](#)
- ラテンアメリカ：[Regional Report: Latin America Continuity and Change](#)
- アメリカ：[Repositories, and Scholarly Communications: An Optimist's View from the United States](#)
- カナダ：[Canadian Repository Landscape](#)

次回の総会はフランス リヨンでの開催を予定している。

## 2. メトリクス

metrics Project が開催したワークショップでは、さまざまなメトリクスに関連する事例が紹介され、利用統計とオルトメトリクスのグループに分かれてそれぞれ

- 利用統計 (オルトメトリクス) に実際のリポジトリのコンテンツの利用状況 (影響

- 力) がどの程度反映されているか
- 利用統計 (オルトメトリクス) を提供する動機は何か
- 実施の妨げになるものは何か
- 利用統計を収集・表示するために使用しているツールは何か
- 今後の論文メトリクスを考えるにあたり、データや図書、ソフトウェア等の他の資源に関連する側面は何か
- 今後の、確実に・信頼でき・有意義なメトリクスに向けてできることをテーマに情報交換・議論が交わされた。

利用統計のグループワークに参加したところ、

- 「実際の」利用状況とは何か
- データの保護等の法律上の問題や費用の問題の他、数字はすでにいろいろと収集することができるが、ユーザに対して提供する時にその数字の持つ意味をどう説明できるかという課題がある
- 利用統計はそれぞれの研究文化に寄り添ったものであるべき
- オルトメトリクスに関しては各サービスから集計できる数字はそれぞれ違う意味を持っており単純に足し算はできない

といった意見があり、統計の収集面よりも提供面に関して活発に議論が行われた。

- [Open Metrics as Part of Persistent Identifier Infrastructure](#)
- [Social Media: The New Gatekeeper](#)
- [\\*metrics Project & Social Media Registry \(SoMeR\)](#)
- [Technical Implementation of Information Gathering](#)
- [Standardised usage statistics from repositories \(IRUS\)](#)
- [The larger the network the better the usage statistics: the how, when, why to participate in OpenAIRE usage metrics](#)
- [ECONSTOR: Usage statistics of a subject repository](#)
- [Quality challenges of altmetric data aggregators](#)

### 3. メタデータと統制語彙

COAR Controlled Vocabulary について、策定・検討状況と各国での実装事例について紹介があり、JPCOAR スキーマも COAR Controlled Vocabulary を採用しつつも独自の語彙を取り入れている事例として触れられた。

前回の COAR 総会以降の進捗としては、[Resource Types Vocabulary のバージョン 2.0 案](#)が公開されており、課題となっていたアラビア語への翻訳や新たな語彙の追加等が行われた。

また、Version Types Vocabulary が NISO-JAV Vocabulary を元に検討されており、特に語彙の 1 つである「Proof」が正確さに欠けており課題となっている。

COAR Controlled Vocabulary Editorial group は現在、実装のためのガイドを作成中であり、現時点での不明点やさらなるメタデータガイドラインへの採用事例等を求めている。

また、COAR Controlled Vocabulary を使用しない場合の理由が求められ、意見交換が行われた。

Resource Types Vocabulary が複雑な階層構造を持つのに対してフラットな構造を持つメタデータスキーマを使用していることや、各大学で個別の要望に応えるために独自の語彙を使用しており流通させる際にどのように COAR Controlled Vocabulary に対応させればいいのかよくわからないことに不安を感じていることが挙げられたが、統制語彙はあくまでも相互運用性を確保するためのものであり同じ語彙（や URI）を使用することそのものが大事なのではなく、最も大切なことはコンセプト（語彙の定義）を調整・共有することなのでそのために対話をというコメントがあった。

あくまでもコンセプトや定義を共有するということが強調され、フィードバックを求めていることが述べられた。

また、語彙を実装することに関連して、物質・材料研究機構の次世代のデータリポジトリが事例として紹介されたが、そこでも SKOS を使用し概念を共有することについて語られた。

- 概要：[Overview and Importance of Metadata and Vocabularies](#)
- 策定状況：[COAR Vocabularies: Update and Next Steps](#)
- 実装に向けて：[Implementing COAR Controlled Vocabularies](#)
- 事例（欧州）：[OpenAIRE Guidelines: Application Profiles](#)
- 事例（ラテンアメリカ）：[Guidelines](#)
- 次世代リポジトリ：[Future Developments: NGR Repositories and Linked Data](#)

#### 4. 次世代リポジトリ

次世代リポジトリ WG より学術情報流通の現状や課題についての説明と、WG の活動について報告があった。

次世代リポジトリの機能・技術指針に関する報告書“[Behaviours and Technical Recommendations of the COAR Next Generation Repositories Working Group](#)”を公開し、次世代リポジトリに推奨される 11 の機能とそれに関する 19 の技術を示した。

現在はリポジトリシステムへの実装やサポート、また新しい技術のチェックを引き続き行っている。

4Science からは報告書内で関連する技術として挙げられていた中でも Signposting や ResourceSync 等について取り上げ、DSpace での実装について紹介があった。

また、Invenio とそれを元に開発されている WEKO3 における実装についても紹介された。

- 背景・概要：[Open is not enough! Sustainability, equality, and innovation in scholarly communication](#)
- 事例（4Science）：[Next Generation Repositories](#)
- 事例（Invenio）：[Next Generation Repositories: Invenio](#)

## 5. ポスター

会場内にはポスターが掲示されており、空き時間に自由に見てまわれるようになっていた。

JPCOAR からも 2017 年 10 月に公開した新しいメタデータスキーマである「JPCOAR スキーマ」を紹介する[ポスター](#)を提出しており、いくつか質問やコメントをいただいた。COAR Controlled Vocabulary を取り入れている点はもちろん、研究データ対応のためにどのようなスキーマを参考にし、JPCOAR スキーマ独自の点はどこかといったようなスキーマ自体の詳細についてだけでなく、どの程度の機関がこのスキーマを使用するのか、新たなスキーマに対する反応についてといったような普及面にも関心がもたれている様子であった。

特に COAR Controlled Vocabulary を取り入れている点に関しては、今後も先行事例として COAR へ貢献できることがあるのではないかと感じた。

上記のポスターも含め、会場内に掲示されていたポスターは[プログラムの Coffee & Poster Viewing](#)から閲覧することができる。

## 6. その他

オープンアクセスは単純に学術成果を無料で公開したり知識を入手する方法を確保したりするだけでは不十分で、公開されたものが実際に使用され研究を促進させるような、研究サイクル全体に参加する必要があることを各セッションで繰り返し聞くことがあり印象に残っている。

最後に、ポスター制作においてアドバイスいただいた JPCOAR メタデータ普及タスクフォースメンバー各位に感謝申し上げます。また、出張事務をご担当いただいた JPCOAR 事務局および国立情報学研究所学術コンテンツ課のみなさまにも感謝申し上げます。